

【テーマ】

□ 万葉歌を読めば時代がわかる②

～奈良時代―人民の苦しみ・防人の歌②～



公民館だより

2018年7月28日(金)

番外編・第5号

奈良市 二名公民館
館長 上田善紀・発行

■ 前回は、奈良時代の税制と、その中で課せられた兵役である防人について説明した上で、防人の歌の中でも最も有名な作品を一首、紹介しました。

今回は、ほとんど知られてはいない歌を時代背景とともに紹介しましょう。



足柄の御坂に立して 袖振らば 家なる妹は 清に見もかも

藤原部等母麿 卷二十一―四四二―三

○ 足柄の御坂に立って袖を振ったら、家にいる妻ははっきりと見てくれるであろうか。

色深く 背なが衣は 染めましを 御坂たばらば ま清かに見む

妻の物部刀自売 卷二十一―四四二―四

○ 色濃くうちの人の着物を染めておけばよかつたなあ。足柄の御坂を通して、
ていただく時は、はっきりと見られるでしょうに…。

この二首は武蔵国の防人とその妻との贈答歌です。防人として家を離れる夫が「足柄峠で袖を振ったら、家の妻がはっきり見てくれるだろうか」といったのに対して、「こんなことになるのであったならば、あなたの衣をもっと濃い色に染めておけばよかった、そうしたらなら、きっとはっきり見られたでしょうに…」と妻が答えたのです。私はいま、これを書きながらじーんとした気持ちになりました。奈良時代の東国、つまりは辺境の地に住んでいた教養なき農民の夫婦の歌のやりとりだと思つくと、如何ともしがたい気持ちになります。

「足柄の御坂」とは、今の神奈川県南足柄市矢倉沢から静岡県駿東郡小山町に越える富士山東麓の足柄峠のことです。そこを行く夫が、埼玉郡（今の埼玉県熊谷市・行田市あたり）にいる妻にあてた内容です。直線距離では100kmもの隔たりがあり、肉眼では埼玉県行田市から箱根の峠はとうてい見えません。この歌は、目に見える現実世界の情景を詠んでいるのではなく、精神世界の心の内を魂で知覚し合っている歌なのです。

ところで、出征する夫とそれを見送る妻とのやりとりをした歌ですね。どうやって歌を交換し、またその歌を収集したのでしょうか。

実は、大伴家持に命じられて歌を収集した役人は一人ではありませんでした。国ごとにその役割を果たす立場の人がいたわけです。この歌の場合は、武蔵国の防人を担当していた部領使、掾正六位上安曇宿禰三國という人が選びました。安曇宿禰三國が選んで提出した歌は20首で、そのうち大伴家持に採用されたのは12首と記録に残っています。

では、どうして夫婦の歌が並んで掲載されているのでしょうか。

各郡から選ばれた防人たちは、まずは国庁（*今の県庁のような存在）に集められ、国ごとにまとまって隊伍を組んで旅立っていったということを前回で書きました。

出発前の国庁では編成式が行われていました。そしてその後、「激励会・送別会」とでもいえる家族同伴の宴席があったようです。その会場で詠み合った歌を安曇宿禰三國さんがしっかりと書き留めて収集したというわけです。

ついであるが、当時は夫婦別姓、この奥さんの「部刀自売」という名称は、その人の名前（固有名詞）ではなく、「〇〇さんちの奥さん」といった一般的な女性を指す普通名詞です。

じいんとくるような歌は、まだまだあります。

我る旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ我が妻かなしも

玉作部広目 卷二十一―四三三

○ 私の旅は仕方がない旅だとしてあきらめもするが、家で子を抱えてやっ
れているであろう、私の妻がいとおしくて、いとおしくて。

▽ 貧しくとも誠実で妻の安否を気遣う農民の姿が見えてきますね。

□

□

□

吾が妻も絵に描き取らむ暇もか旅ゆく吾は見つつ憊はむ

物部古麿 卷二十一―四三二七

○ 妻の姿を絵に描く時間が欲しいものだ、そうすれば旅の途中にその絵を
見て妻の姿を思い描くことができるだろうに。

▽ 防人選ばれて出立するまでの時間があまりなかったと思われま。時間を
おきすぎると逃亡の恐れがあったためでしょう。

妻の絵を描いておきたかったという物部古麿さんですが、希少な筆や紙な
ど当然あるわけではなく、せめて妻の姿だけでも留めおきたいという切実な
願いを込めた歌です。

□

□

□



